

# 『南へ』論

—— 「憂える」から「信じてみる」へ ——

齋 藤 陽 一

## 序

日本の劇作家、野田秀樹の戯曲、『南へ』論に「『憂える』から『信じてみる』へ」という奇妙な副題をつけたのは、野田秀樹自身の戯曲集の表題に由来する。野田秀樹は2007年に『21世紀を憂える戯曲集』を出し、今年、2011年に『21世紀を信じてみる戯曲集』を出した<sup>1</sup>。

21世紀の十分の一しか過ぎていないところで大げさなタイトル<sup>2</sup>ではあるが、この短期間の間に「憂える」から「信じてみる」へと変わったことがむしろ驚きかもしれない。もっとも、「信じてみる」という表題について、野田は『21世紀を信じてみる戯曲集』のあとがきで次のように説明する。少し長くなるが、引用しておこう。

どう考えても「信頼」というものを抜きに人間は「この世」を語れない、生きられないはずなのだが、流行りではないという理由で、おざなりになっている。

<sup>1</sup> なお、その前に出された戯曲集の表題は、『二十一世紀最初の戯曲集』である。また『21世紀を憂える戯曲集』に『オイル』、『ロープ』、『THE BEE』が収められ、『21世紀を信じてみる戯曲集』に『ザ・キャラクター』、『表に出ろいっ!』、『南へ』が収められている。

<sup>2</sup> 野田は『21世紀を憂える戯曲集』のあとがきに「21世紀関係者」という表題を付け、「21世紀はまだこれから百年近くもある」のに「もう21世紀を知り尽くした男気分である」と続け、自分のことを「自称21世紀関係者である」としている。そして、関係者である以上、「『頼まれもしないのに、しゃしゃり出て、もっともらしく語り』始めなくてはいけない」と、いわば、21世紀を対象とする覚悟をユーモラスに語っている。(同書 pp. 298-299)

特にこの日本では、かつて「神様」であると「信頼」していた方が「人間」に変わったことを、つまり大きな「信頼」が崩れた話を、もやもやとしたままに今日まで来てしまった。そのために、いろんなところでいろんな形で「信頼」が崩れたのではないかと。その「信頼」に関するもやもやとしたものを形にすると、こんな芝居の連作が出来上がった、というわけです。(野田秀樹『21世紀を信じてみる戯曲集』 p.340<sup>3</sup>)

「信じてみる」という言葉に積極的な意味合いはあまりなく、むしろ「信頼」についての戯曲という方が内容を表しているかもしれない。日本経済新聞の文化部編集委員の内田洋一は雑誌『悲劇喜劇』の2011年5月号の演劇時評の中で、『21世紀を信じてみる戯曲集』の3作品を「カルト三部作」(同誌 p.62)と呼んでいる。

また、内田は、その著書『野田秀樹』の中では次のように書く。

九九年の『パンドラの鐘』で長崎の原爆を、二〇〇二年の『オイル』で石油をめぐる戦争と原爆投下の秘史を、二〇〇六年の『ロープ』でベトナム戦争の虐殺事件を描くにいたる。私はこれらを「戦争三部作」に見立てている。(内田洋一『野田秀樹』 p.130)

しかしながら、「戦争三部作」で問題になった、原爆をめぐる天皇と戦争の関わりといったことは、『南へ』の中でも形を変えて取り上げられている。また、『ロープ』に登場する視聴率に一喜一憂するテレビ局の人間の姿が、『南へ』の中でもまた見られる。つまり、「憂える」から「信じてみる」では、変化した部分だけでなく、連続して問題とされているテーマも意外と多いのではないだろうか。そこで、この小論においては、「憂える」から「信じてみる」へと共通に取り上げられている中心的なテーマを抽出して、折に触れそれ以前の作品にも言及しながら、『南へ』の中では、それらがどのように描かれているのかについ

---

<sup>3</sup> なお、二つの戯曲集からの引用は、このあと、すべてページ数のみ記す。

て述べたいと思う。

なお、6作品が公演された期間にも、旧作が3作品（『走れメルス』、『贗作・罪と罰』、『キル』）、新作が2作品（『パイパー』と『ザ・ダイバー』）、野田の主宰するNODA・MAPにより上演されているが、旧作が新たに戯曲として出版されることはなく、新作も戯曲集の形ではまだまとめられていないので、今回は、これらについては扱わない。

## 『南へ』の構造

論を進める前に、『南へ』の構造を確認しておきたい。野田の芝居は、二つの時代が交錯する複雑な構造を持つことが多いので、整理する必要があると思うのである。

このような構造の戯曲は、夢の遊眠社時代から書かれていたが（例えば、『ゼンダ城の虜』、『小指の思い出』）、解散後、企画製作会社NODA・MAPを設立してからも、変わらず野田の特徴となっている。今回触れる6本の戯曲のうち、「番外公演」と銘打って少人数で演じられた、『THE BEE』と『表にでろい！』は例外として、残りの4本はいずれもそのような構造になっている。『南へ』以外の3本について簡単に触れておくなら、『オイル』は1945年前後の島根と国譲りの時代の出雲、『ロープ』が現代日本のプロレスの世界とベトナム戦争時におけるソンミ村<sup>4</sup>、『ザ・キャラクター』では、書道教室の話にギリシア神話のダフネーとアポローンの話が絡む。そして、その中で時間が過去から現在、また、現在から過去へと行き来するので、複雑な構造になるのである。

『南へ』では、無事山の火口付近にある火山観測所と、宝永の世にその火山が爆発しそうになった時の同じ場所が舞台となっている。

複雑を極めるこの作品の構造を、現代をA、宝永の世をBとし、簡単なあらすじとともに、まず記しておきたいと思う。数字により場面を分けたが、内容よりは、単純に時間と場所の変化によっている。

<sup>4</sup> 作品中では、虐殺が行われたソンミ村の中の集落名、「ミライ」で呼ばれる。

1 A (p.227～p.238) 無事山の火口付近にある火山観測所(以下火山観測所)

ここに自殺未遂者と思われるあまねが連れて来られ、その後、赴任することになった南のり平(以下、南)がやって来る。他にも、観光客2人が行方不明という連絡が入る。地震。

2 A (p.239～p.244) 火山観測所の下にある旅館(以下旅館)

S Pに囲まれたV I Pと旅館の三つ子達との会話

3 A (p.244～p.270) 火山観測所

南がマグマの動き(水蒸気爆発の兆候)を指摘するも里長所長は、「噴火の危険性なし」という報告を承認。そこへ旅館の長女、ミハルがV I Pら観光客を連れてくる。V I Pは天皇の行幸のための調査であることをほのめかし、どこかでそれを聞きつけた地元の新聞社の記者がやってくる。記者達を追いだしたあと、行方不明と言われていた2人が現れる。V I Pはその一人に「陛下」と呼びかけるが、彼らは行幸の前にリハーサルをする芸能の民の家系だと自己紹介する(以下で、「御毒見」とも表記する)。南が噴火の可能性を指摘して、行幸を取りやめるように言うが、他の人間は聞く耳を持たない。ミハルは宝永の大噴火の時先祖が予知したことを伝える巻物を取り出し、今度は噴火しないと言う。その誰にも読めない字で書かれた巻物について、あまねが、サンカ文字であると指摘する。そしてそれを彼女が読むことで宝永の世に飛ぶ。

4 B (p.270～p.278) 同じ山の中

ノリヘイが狼煙で「間もなく山が火を噴く」と「山の里人」達を呼び出す。人々は彼を狼少年だと言う。そこへ役行者が帝の巫(カンナギ)と妃の巫を連れて現れる。行幸の先触れと言う彼らの人々は信じないので、自分たちのありがたみを見せるために「おおなめまつり」を始める。

なお、現代の南のり平とこの時代のノリヘイを同じ役者が演じており、他に、あまねはアマネ、V I Pは役行者、帝の御毒見は帝の巫、妃の御毒見は妃の巫となっている。また、火山観測所の里長所長はサトオサとなっている。

## 5 A (p.279～p.298) 火山観測所

単にあまねが読み解いた巻物の内容を説明しただけだったはずが、現代の人も「おおなめまつり」を見たという風情。人々は天皇の行幸が村を幸せにすると、南が主張する噴火の可能性にも耳を貸さない。南は自分が来たところに電話をしようとするが、それがどこなのか思い出せない。あろうことか、持っていたIDカードの自分の写真の下に別の写真があるのを発見し、南は、自分が誰なのか分からなくなる。ショックを受ける南をあまねが慰めるが、彼女のことを所員の人吉は、「他人の記憶を食う」と評する。そのうちに、どこで聞きつけたか、火山が噴火すると聞いて報道陣が集まる。二人きりになったあまねと南、あまねは「あなたも私と一緒に」と声をかける。そして、「あなたも記憶を学んだのかな」と聞く。そして、南のことをこれからは「日本人」と呼ぶと提案する。そこへ報道陣に混じって、観測所をいつの間にかやめていた道理（みちすじ）が、学術調査団の一員としてやってくる。そして、観測所の人間を問い詰め、「陛下がいらっしゃる時は噴火しない。で、この観測所が閉鎖されそうになると、噴火する」という結論を導き出す。

## 6 A (p.299～p.313) 旅館

ミハルがマスコミから、観測所が「噴火あり」と言っていると聞き、「噴火なし」と予知する。そこへVIPと二人の御毒見が現れるが、道理は、そんなことは宮内庁はやっていないと明かし、二人を「正体不明の人」と呼ぶ。彼らが詐欺師として逮捕されるように連れ去られたあと、噴火もないだろうということになるが、そこに南が現れて、「大噴火はあります！」と叫ぶので、たちまち記者会見になる。報道陣を罵倒する南を引き取ってあまねは、南は「狼少年信仰の熱烈な信者なんです」と説明する。狼がやって来たその先を考えるとという意味だと。そして、300年前（宝永の世）にも同じことがあったと説明。報道陣はそれに興味を示し、あまねが宝永4年の大噴火のことを話し始める。

## 7 B (p.313～p.318) 火口 あまねの語る物語1

噴火を予言するノリヘイ、逃げても住むところがないという村人に、ノ

リヘイは帝の行幸という「お墨付き」をもらおうと提案。ところが行幸の行列が登ってくるときに本当に噴火がおこりそうになる。そこで行列を止めるためにノリヘイは帝が登っている山の南側へ走るが、大噴火であえなく死んでしまう。

8 A (p.319～p.320) 火口

ノリヘイの墓も披露されるが、報道陣は、あまねの今の物語では「数字が取りにくい」という反応。

9 B (p.320～p.323) 山の中 あまねの語る物語2

生き返ったノリヘイが山を下っていくと、帝の行幸の行列と出会い、とどまるように言う。噴火すると言っても信じてもらえないので、どうすれば信じてもらえるかと問う。すると、「腹を切れ」と付き添いの役行者に言われ、ノリヘイは「何かを信じて」腹をきる。

10 A (p.323～p.324) 火口

腹切りは評判が悪く、報道陣も帰りかけているので、あまねは別の物語を始める。

11 B (p.324～p.326) 山の中 あまねの語る物語3

山の里人達に役行者らが、帝は実際には来ないのだと言っている。ノリヘイは、別の場所において、帝がこないのではないかと疑い、大噴火なんか起こらないとつぶやく。

12 A (p.326～) 火山観測所

現代でも、噴火はおこらないということになっている。報道陣らは去り始める。あまねと南だけが残し、テレビにあれだけ映ったのに、誰からも連絡がないという南に、あまねは自分は白頭山のあるところに連れ戻されると震える。そして、自分は北から来たと言明する。そこへ帝の御毒見と妃の御毒見が連れて来られる。日本語をしゃべれない彼らのことをあまねは、自分の両親だと説明する。そして、SPを連れてVIPに似た男が来て、連れていってしまう。やがてSPが南とあまねを捕らえようとするが、「日本人だ」と名乗る南はおいておかれ、あまねだけ連れていかれる。南にはすでにあまねが見えない。道理と人吉が戻ってきて、南は、「目の前

で起こったことが、何だったのか分からない」と言い、「いつまで夢遊病者のままだらう僕らは」と自問する。野球の中継に「この世の終わりだ!」という所長、しかし、轟音とともに、モニターには火を噴く火山が映る。

『オイル』をめぐる演劇時評の中で毎日新聞編集委員の高橋豊は、「三つの時空が、古代と、太平洋戦争と現代と三つの時空が複雑に交錯しているのに、それがわかりにくさに通じない」(『悲劇喜劇』2003年7月号 p.82)と述べている。「わかりにくさ」の議論はおいておくとして、『オイル』には三つの時空があるということになるが<sup>5</sup>、さらに、太平洋戦争後の世界が描かれていたと思ったのに、いつの間にかそれが夢であったかのように終戦直前に戻るといふ仕掛が施されている。単純に二つの時代を行き来するだけではない訳だが、『南へ』でもこのような仕掛が見られる。あまねの「……あの時の父と母のように、いつか私も連れ戻される」(p.332)という台詞から、直前の帝の御毒見と妃の御毒見がVIPに似た男に連れ去られるシーン(「これから、大切な人がここへいらっしやる」というVIPの台詞が、天皇の行幸時に不穏分子の存在を取り締まるという事実を想起させる)は、あまねの回想らしいということが分かる。また、戯曲では、彼らを見つけた観測所の面々の役名に、それぞれ、「里長に似た男」というように「に似た男」という言葉が付け加えられている。

このように複雑な構造をなしているが、さらに、中間の部分は夢とも、夢のように過ぎたかのように描かれているとも取りうるような形になっている。幕切れ近く、「何事も起こらなかったかのように、南、カーテンを開ける」(p.335)というト書きの後に、南は「今日も元気か?……よし、と」(同頁)と言うが、同じ台詞が、芝居が始まってからしばらくしてある。誰にも会うことなくノーチェックでここに入ってきた南だが、この最初の時には、あまねが「何してるんですか?」(p.230)と問いかけることで二人の間に会話が始まる。そして、その分、幕切れ近くでは、そのあまねとの出来事が全くなかったかのような印

<sup>5</sup> ただし、現在は、ほのめかし程度に出ていると考えるべきだろう。

象を与える。また、最初のこの台詞の少し前に、所員の人吉と道理が、行方不明者を探しに火口を目指して出て行く (p.229) が、幕切れのこの台詞の直後に、人吉と道理が戻ってくる (p.335)。しかも、この時には、道理は南に「あれ、どなた？」(同頁)と問いかける。最初に出かける時には、実際に、まだ南に会っていなかったのだ。この部分の意味については、また最後に触れたいと思うが、いずれにせよ、現代の中だけでも、時間の流れが奇妙になっている。

尚、この幕切れの部分は、実際の上演<sup>6</sup>にあたってかなり変更された。『21世紀を信じてみる戯曲集』の初出データを記したページに、「『南へ』は、公演前の台本を底本としたため、一部公演時の台詞と異なる場合があります」(p.342)と書かれている。そして、この幕切れがまさにその例となっている。異動を簡単に書いておこう。まず、335ページ、南の「今日も元気か？……よし、と」のあとに、230ページのあまねとの会話を思い出させるように「あ、隣の富士山を見ました」という言葉がはいる。ここで南は、自分であまねからの手紙を発見して、宛名を読む。そのあと、道理、人吉が戻り、道理の「あれ？」以下の会話が始まる。そのあと336ページでは、人吉の「今日は朝から変な奴らばかりがやってくる」が、道理の「僕……ら？」の直後に言われ、南の「おい、日本人、僕（映像では俺）は誰なんだ？」まで行くと、里長所長が飛び出して来て、「この世の終わりだ」の言葉にいく。最後のト書きも、上演されたものは異なっていて、南は3人がモニター（実際に野球のシーンが映っている）を見ているのをそのままにして、日本軍の軍帽をかぶり、ゆっくりと一人出て行く。

このように、実際上演されたものは戯曲と異なっているが、この小論では、この戯曲の方を分析対象として、考えていきたいと思う。

---

<sup>6</sup> 筆者は、2011年3月27日に東京芸術劇場中ホールで行われた公演を見た。また、WOWOWによって、同年7月8日に放映された公演の中継も参考にしていうことを付け加えておく。



## マスコミ論

この作品の中には、報道陣が数字のとれるネタを探して騒ぐシーンがあるが（例えば319ページの「数字が取りにくいな」という台詞）、このようなマスコミの姿が現れるのは、この二つの戯曲集に共通している。

『オイル』では、ニューヨークタイムズに自分たちの姿が掲載されているのではと考える、マッサーカ軍曹らの姿が描かれている程度だが、次の、『ロープ』ではこのテーマが前面に出ている。登場人物の中にD（ディレクターの略）、A D、J H N D D T（「自分ひとりでは何もできないディレクターの妻」のイニシャルをつなげた呼び名）が出てきて、弱小プロレス団体の取材をするうちに、視聴率を取ろうとする余り、それが競技ではなく本物の暴力を生んでしまう姿が描かれている。さらに、「ロープが張られている限り、この中では何でもできる」（J H N D D Tの台詞 p.179）という認識から、ひと殺しを放送しようということが語られる。やがて、そうした姿勢がベトナム、ソンミ村での虐殺につながることになるが、もちろん、ここにも時空を越えた移動が見られる。『THE BEE』においても、自分の妻子を人質にされた被害者、井戸が、その犯人の男の家に行き、同じくその妻子を人質に取ってしまうが、その犯人の家をテレビ局の Reporter たちが取り囲む。初めのうちは、Reporter 達を利用して自分の妻子を助けようとした井戸だが、やがて残忍にも犯人、小古呂の息子の指を切り落とすようになる。しかし、繰り返されるそうした残虐行為もいつの間にか儀式のようになる。マスコミの報道のマンネリ化と平行関係にあるかのようだ。

『ザ・キャラクター』では、息子を、書道教室に偽装されたカルトに奪われ、一人で潜入して調査をした「オバちゃん」の尽力により実態が明らかになると、大量のマスコミの人間が集まるようになる。ト書きには「書道教室は、報道陣に囲まれているのである」（p.84）とある。やがて、テレビ局が放送するようになるが、「モニターの中の男キャスター」は、「まったく人間としての深みがない。どうしてこんな男を信じてしまうんでしょう」（p.93）と正論を吐くが、「どうして若者が、こんな薄汚いデブにひっかかっちゃうんでしょうね。ど

うせ焼き肉弁当とか今頃食べてるんですよ」(p.94)とも言う。これは批判されている家元がまさに焼き肉弁当を食べるところであったので、笑いを生むが、緊張感のないキャストの姿を描いているとも考えられるのではないだろうか。当事者意識のなさと言ってもよいかもしれない。

こうしたマスコミの人間達の姿は、『南へ』の中でも描かれている。噴火があるかもしれないということで、報道陣が集まってくるが、彼らの関心は、大噴火がいつ起こるのか、Xデイがいつなのかに向かう。その中で南は次のように言う。

私は日本人であります。そして、こいつら同様、私が待っていたのは、大噴火でした。そう願いながらも絶対に自分のところへ火は噴いてこない、その安心感の中で暮らしている、いわばこいつらは何ですか!?! 所長! (p.305)

ここで南が自分のことを日本人と呼んでいるのは、その前にIDカードの写真の件で自分が何者であるかが分からなくなってしまったからだが、その分、マスコミの人間だけでなく、(我々一般の)日本人も、災害を待ち望みながら安心感の中で暮らしているという意味に取れるという仕掛けになっている。それまでの作品でのマスコミ批判が、それを許容している日本人一般の姿勢にも向かっていると考えられないだろうか? その後の、南の「貴様らは、大噴火して何もかもが黒焦げになって、その中から天皇陛下が見つかる。それをぬくぬくとモニターで見る。それが望みなんだろ」(p.305)という台詞も、直接にはマスコミ批判だが、「モニターで見る」という行為は、一般の視聴者もすることである。そして、何より、これだけマスコミを批判している南だが、「僕の顔は何度も映ったのに、誰ひとり連絡が来ない」(p.328)と後で言うように、自分が何者であるかの手がかりをマスコミに期待しているのである。そうした、マスコミと一般の視聴者の共犯関係が、この作品では表れてきたと言えるだろう。

## 原爆論，天皇制論

野田は、『パンドラの鐘』以降、自らが長崎の生まれであることからか、原爆を扱うことが多くなった<sup>7</sup>。『パンドラの鐘』では、古代の王国（おそらく、現在の長崎にあった）と第2次世界大戦前の長崎が舞台となっている。そして、原爆の比喩である「もうひとつの太陽」を投下させないために自ら埋められることを望んだヒメ女に対して、現代ではどうだったか？という問いかけがなされる。現代の方に登場するタマキの次のような台詞を通して。

タマキ あたし達だけは知ってるじゃない、ヒメ女とミズヲの物語。もしアメリカが、もうひとつの太陽を爆発させようとしたって、王が守ってくれる。滅びようとする日のあのヒメ女のように、ヒメ女が、この土地を救ったように、王ならば、必ずその地が滅びる前に、きっと、わが身を埋めるでしょう。（『文學界』2000年1月号 p.136）

『オイル』では幕切れのシーンが1945年8月6日の広島になっており、ヤマトの最後の台詞は、「太田川の河畔だ。川縁にある産業奨励館っていう建物の中から……。」（p.114）である。そして、富士はその直後、「人は何時か忘れてしまうの？ 原爆を落とされた日のことを」（p.115）と言う。

この作品は、原爆を落としたアメリカを告発する作品と考えられる。それを石油利権のためにイラクに進出するアメリカの姿とダブらせ、さらに「八月に原爆を二つ落とされたから、九月に飛行機を二機飛ばすのよ」（p.108）という富士の台詞にもあるように、原爆投下への復讐心と9・11が重なるように描かれている。

『21世紀を憂える戯曲集』の中には「二〇〇三年「オイル」公演パンフレットより」として次のように書かれている。

<sup>7</sup> 『ロープ』の中には、プロレスの実況中継をするタマシイの台詞に「ミサイルキックから抱えあげての原爆落とし」（p.210）といういささか不穏当な台詞があるが、プロレスの技では、確かに「原爆」という言葉が使われることがある。

1999年に『パンドラの鐘』という芝居を上演した時に自分の中で、もうひとつ別の目線から書かねばならない。その思いが芽生えた。

自虐性の強い現代の日本人であるからこそ、余計、絶対に書いておかなくてはならない、このことを。そう思った。それが、この芝居だった。(p.6)

このように、「もうひとつ別の目線から書か」れたにも関わらず、ヤマトと富士の間には次のような会話がある。

ヤマト 何故原爆はこの日本に落ちたんだ？

富士 神様が落としたわけではないわ。

ヤマト でも止められただろう。ここに神様がいのなら。

富士 人間が愚かなのよ。

ヤマト 止めることの出来なかった天皇が、神様ではなかったってバレたように、どこにも神様なんかいないのさ。(pp.84-85)

このように野田の作品において、原爆の問題は、しばしば天皇の決断が遅かったが故に原爆が落ちたという、天皇の責任の問題と関連させて語られてきた。

『21世紀を信じてみる戯曲集』では、原爆が前面に出ることはなくなった。その一方で、『南へ』においては天皇制の問題がまた扱われている。直接的には、天皇の行幸の予行演習という形で天皇が現れてくるのであるが、天皇制とそれを利用した人々、あるいは、それを信じた人々の問題が扱われていると言えるだろう<sup>8</sup>。

天皇制とそれを利用した人々という問題は、『南へ』では、いささか露骨な形

---

<sup>8</sup> 『ザ・キャラクター』と『表に出ろいっ!』では天皇制の問題は直接には扱われていないが、ともにカルトの問題が描かれている。もとより、これらは「信頼」についての戯曲であった。こう考えるとオウム真理教の事件を描いた『ザ・キャラクター』においても、家元と周りでそれを支えた人間、それを信じる人々の関係に、同じものを見ることができよう。

で描かれている。現代においては、帝の御毒見、妃の御毒見と呼ばれる二人を連れてくるVIPが、「この国の歴史は天皇を利用した詐欺の積み重ねなんだよ」(p.302)と毒舌を吐く。この火山のある町を天皇が訪問するというので、その下調べのための人々であると思われていた3人組がどうやら詐欺師らしいとばれて、問い詰められた時の台詞である。また宝永の世の登場人物である、帝の巫と妃の巫を引き連れた役行者からも「この国は天皇を利用した天皇詐欺の歴史なんだわ」(p.325)という言葉が、これまた天皇の行幸はないと知られた時の居直りの台詞として発せられている。

この天皇制をめぐる「詐欺」という言葉だが、すでに『TABOO』の中にも現れていた。一休と天皇との間に次のような会話が繰り返される。

一 休 天皇様は、どんな芸をもった役者なのでございますか。

天 皇 わしは何もできぬ。

一 休 何もせぬのですか。

天 皇 わしはできぬ。

一 休 わたしがうかがいたいことはひとつだけです。あなたは、日本一のスターですか、それとも詐欺師ですか。

天 皇 わしか？ わしは天皇だ。(『解散後全劇作』 p.236)

いずれにせよ、周りの人間が、天皇の名を利用していかに権力を奪取してきたのかにウェイトが置かれているのだが、『パンドラの鐘』や『オイル』に見られた、第2次世界大戦の終結と原爆の問題は、比喩的な形ではあるが、天皇と臣民との関係を問うという形で継承されている。

宝永の世のノリヘイは、噴火がくるということを知ってもらおうと努めるのだが、その時のやりとりを、長くなるが引用しておこう。

ノリヘイ どうすれば、俺のコトバを信じてもらえますか？ 大噴火が起こるとこのコトバを。

(役行者) 核心をついてきたな。

(帝の巫) だったら、天狗、お前が語れ。

(役行者) はい……腹を切れ。

ノリヘイ は？

(役行者) 日本人であれば、腹を切れ、そして、本気を見せろ。

ノリヘイ 自分のコトバを信じてもらうために、日本人ならば腹を切れ。帝が、本気でそんなことを願っているのですか？

(帝の巫) ……。

ノリヘイ 何故、お黙りになるのです……なんで俺は、目の前のこの知らない人のために、こんなにもひどい目にあっているんだ？

あまね けれども、南ノリヘイは、何かを信じて……。

ノリヘイ 大噴火するぞ～！

いつしか宝永の世の天皇行幸が天皇の軍隊の行軍に見えている。

ノリヘイ、腹を切る。(pp.322-323)

どうすれば自分のコトバを信じてもらえるのかというノリヘイの間への、「腹を切れ」という回答は、いささか唐突だが、腹切りは日本人のステレオタイプのイメージであり、神風特攻隊をもどこかで想起させ、ついには、「天皇行幸が天皇の軍隊の行軍に見えている」というト書きを導き出していると言えるだろう。しかし、それ以上に重要なのは、帝の巫（ここでは帝を演じているので、帝そのものの象徴と捉えてよいであろう）が自ら語るのではなく、「天狗、お前が語れ」と役行者に命令し、役行者が「腹を切れ」と命令していることだろう。さらに、ノリヘイが「何故、お黙りになるのです」と言うように、肝心なことには無言を通すというところにも、戦争末期の天皇の行動を暗示するものがあるだろう。

このように『南へ』では、原爆のテーマは背景に退いたが、天皇と戦争という問題は依然残っており、そこに、それを信じる人との関係が出てきたと言えるだろう。

尚、オウム真理教の問題を扱った『ザ・キャラクター』も、野田の頭の中で

は、天皇とつながっている。この項を閉じるのにあたって、『野田秀樹 赤鬼の挑戦』から野田の言葉を引いておこう。

結局麻原彰晃って小天皇でしょう。オウム真理教の事件があって、逮捕された信徒の態度が、戦後の日本人の態度にもものすごく似ている。それまでの天皇を突然非難しはじめた人がいるように、麻原は全然違って、だめだったという奴がいれば、いつまでも麻原を信じ続ける人もいる。それから大多数のわからなくなっちゃった人たちがいて、それは戦後の日本人の姿そのもので、天皇に対してわからなくなっちゃって、そのまま何の答えもわれわれは持たないで、なんとなく天皇は象徴であるというよくわからない言葉でもって、今まで来ている。（『野田秀樹 赤鬼の挑戦』 p.159）

## 日本人論，日本文化論

ここまで、6作品に多く見られるテーマとして、「マスコミ批判」、「原爆論、天皇制論」について述べてきた。そして、『南へ』においては、前者ではマスコミと一般の視聴者の共犯関係が、後者では天皇とそれを信じる人との関係が問題とされたということを指摘した。結局、この両者は、ともに「日本人論」、「日本文化論」へと収斂するだろう。

日本人、日本文化について、野田は以前から発言をしてきた。上で引いた文章にも、「戦後の日本人の姿そのもの」という言葉が見られるが、他にも、たとえば、長谷部浩との対談では、次のように述べている。

日本文化の幼稚化とバブルがもたらしたものは近いと思う。俺の芝居が八〇年代に受けた理由ってというのは、やっぱりこの国が幼稚だからだと思っただよ。それは自己否定を含めてね。（長谷部浩『盗まれたリアル』 p.46）

そのあと、「若いやつ嫌い」という自分のかつての言葉を引用しながら、「ところが、たぶん九〇年ぐらいからじゃないかな、若いやつらが血液型っていう

のを信仰しているんじゃないかと気がついた。『B型だから自己中心的』って、まじめに知っているんだもの」(p.46)と続けている。日本が幼稚化し、若い人間が容易にものを信じてしまうことに危惧の念をもらしている。また、その3ページあとには、九〇年代の音楽の歌詞について触れ、

音楽の詞がああ時期から非常に生に変わっていったよね。俺が若いときは気持ち悪かって思っていた「がんばろう」とか「元気出せよ」とかいう言葉がそのまま詞になった。今でいうとSMAPなんかもそうでしょう。若い人たちは言葉に無防備で、素直に全部聞く。ビジュアルに強くなったぶん、言葉に対しての距離感が持たなくなっているよね。だからオカルトなんかも騙されやすい。(同書 p.49)

この「騙されやすい」という問題がまさにこの『21世紀を信じてみる戯曲集』の初めの2作品のテーマでもある。もちろん、これらの作品では「オカルトなんかには」ではなく、「カルトには」ではあるが。では、『南へ』では、信じようとしたものは、何だったのだろうか？

宝永の世で帝の巫らが現れたとき、山の里人（おそらく、山窩を意味するのだろう。あまねが、サンカ文字の巻物を読んでいる以上）は、帝のことを知らない。ノリヘイは、「なに、その天子様って」(p.274)と言っている。しかし、役行者に、天子様のお墨付きがあれば、貧しい村でも食っていけると聞いて、天子さまを村に呼ぼうということになる。いわば、天子様を信じてみることにした訳だ。

しかし、その信じるべきものは、それに値するものだったのだろうか？ この問題を幕切れの台詞から考えて見たい。それはこのようになっている。

里長 ああ、もう、この世の終わりだ！

南のり平 えっ？

里長 九回の裏に……こんなことってありか。(p.337)



幕切れの言葉は、意表をつく。あまねの手紙を受け取った南は、その宛名の部分を読む。「南へ。もしくは、昔、南を名のった日本人へ。」(p.337)そこで所長の声がある。「ああ、もう、この世の終わりだ！」終末の意味かと驚く南をよそに、所長は、「九回の裏に……こんなことってありか」と続ける。野球の話であった。いや、正確には、野球の話と見せかけているというべきかもしれない。なぜなら、そのあとのト書きには、次のようにあるからだ。

テレビのモニターを見つめている里長。

南、人吉、道理も、そのモニターを覗き込む。

そこにあるモニターのすべてが、真っ赤な火を噴く火山を映しだし始める。轟音がある。(p.337)

このようにどちらともとれるようになっているが、こうした重要なシーンで使われているだけに、もう少し野球についての記述に触れておきたいと思う。火山観測所の里長所長は、噴火の危険性がないと決めると、テレビをつけてナイターを見る。テレビを消して水蒸気爆発の危険を説く南の言葉も聞かず、「九回裏じゃないか」(p.246)と再びテレビをつける。そして、「選手なんか見てない。監督を見ているんだ。星野仙一を」(同頁)と続け、さらに「こんなやつどうでもいいでしょ」(同頁)という南の言葉に次のように言う。

里長 よくない！人間は二種類に分かれる。星野仙一がわかるか、星野仙一がわからないか。二種類しかないんだ。言いかえれば「熱い」というコトバに熱くなれるかどうかだ。(p.246)

観客の笑いを意図した言葉でしかないようだが、この星野仙一の名前が、野田のエッセイ集、『ひつまぶし』の中に出てくる。「スポーツは筋書きだらけ、だよ」(『ひつまぶし』 pp.135-138)という表題でマスコミ批判の文脈の中で。北京オリンピックで女子柔道の谷亮子を「ママでも金」という筋書きで書いていたマスコミが、彼女が敗れたために、「星野ジャパン初陣」という筋書きを持

ち出してきたという話である。そして、この場合に星野監督自らが感動秘話を用意していたということを紹介して、ちゃかしている。あらかじめ筋書きを作っておいて人々を予定の方向へ導くといったことへの批判、すなわちマスコミ批判の文脈で読めるだろう。それは、天皇のまわりで扇動した人々にも通じる。あえて言うなら、里長所長は、扇動され、それを信じた人々の象徴と言えるかもしれない。

山窩の人々も、南が象徴する過去の日本人も天皇制を信じた。信じようとした。しかし、その結果はどうだったのだろうか？ 彼らの死の後に出来上がった日本、現代の日本は、火山の噴火を前にしても偽りの感動秘話に彩られた野球の結果の方に関心を持つ、それを「この世の終わり」と表現してしまう、いわば「夢遊病者のまま」の日本である。

この戯曲集の『21世紀を信じてみる戯曲集』という表題には、英訳が付いていて、“The collected plays: daring to believe in the 21<sup>st</sup> Century”となっている。つまり、「信じてみる」は「あえて信じてみる」という語感であろうか。そして、信じる対象は、もちろん、21世紀で、「その価値をあえて信じる」といったところであろう。しかし、台詞の中でダブルミーニングをしばしば用いる野田秀樹である、これを21世紀にあえて信じること（の意味を探る）戯曲であると「あえて」誤読することも可能かもしれない。

## 結 論

このように、『南へ』では、それまでの作品に現れていたテーマを盛りだくさんに取り込みながら、全体として、今の日本人の姿をあぶり出しているが、それをさらに鮮明にしているのがあまねの存在である。

最近の野田秀樹の戯曲は、夢の遊眠社時代に比べて分かり易くなっている。例えば、『ザ・キャラクター』では、幕切れ近くに、「弟、会計、新人の三人が、白いビニール傘で液体の入ったビニール袋を突きさす」(p.134)というシーンを置き、地下鉄サリン事件のことであることをだめ押しのように描いていたが、『南へ』でもその傾向がある。噴火するのকাশないのかというマスコミとの

やりとりのあと、自分の顔がテレビにアップで映し出されたことに気づいたあまねは、自分の出身地にある白頭山という山の名前を口にする。しかも、「白い頭の山と言います」(p.329)とまで丁寧の説明している。それまでもほのめかされていたが、彼女が北朝鮮からやってきたということを明らかにしている<sup>9</sup>。そのため「南へ」という表題の意味が、北朝鮮から韓国への脱北(実際には、中国を経由しながらだろから地理的には「南へ」ではないが)をも意味していることが明らかになる。もちろん、直接には、帝に噴火を伝えるためにノリヘイが南へ走るという意味があり、さらに、あまねが「南へ」宛てた手紙の存在をもしめしており、この表題は、いくつかの意味<sup>10</sup>を同時に持っている。

それでは、このような脱北者<sup>11</sup>としてのあまねが、「日本人」である「南へ」手紙を宛てたということは、どういう意味を持つのだろうか？

あまねが劇中で自分の出自を明かして南へ訴えるのは、北朝鮮から日本に来るのにあたって、何故記憶を学ばなければいけなかったか、何故日本語を学んだのか、といったことだった。しかし、南には、白頭山のことも含め、あまねの言うことが理解できない。そうした問題が存在していることすら、想像もできないようだ。やがて南にはあまねが見えなくなる。今の日本人は、火山の噴火も野球の試合も一緒くたにして暢気に生きている。南の言うように「いつまで夢遊病者のまま」(p.336)なのかと問いたい状況なのである。厳しい状況におかれているあまねから問いかけられることによって、その落差がより一層印

<sup>9</sup> 野田学は、『悲劇喜劇』2011年5月号の「演劇時評」の中で野田秀樹自身から聞いた話を交えながら、「そして最後の方で、金日成の出生神話の中核をなす白頭山に対する言及がありますね。これにより日本の国体神話形成を、金日成神話形成の過程と重ねてしまう。朝鮮半島が二つに分かれているから、双子ではなくて三つ子であるということで、今回三つ子を登場させたと野田さん自身からうかがいました」(同誌 p.62)と述べている。

<sup>10</sup> 内田洋一は、注9と同じ「演劇時評」の中で、「天皇の憑代たちの行列たちが南方で玉砕していった日本の兵士たちの行軍へと変わっていく場面があります」(同誌 p.63)と、「南へ」を戦前の日本の南方への進出と結びつけている。

<sup>11</sup> 同じく内田洋一は、「サイボーグという言葉記憶するあまねには、北の戦士から南の人間に変身した国際職員、金賢姫のかげがある」(同誌 p.65)とあまねをスパイになぞらえている。確かに、記憶を学んだり、日本語を学んだりした彼女にはスパイの雰囲気がある。また、そう思って読むと、冒頭の自殺を心配され、口に何か囁まされそうになるあまねの姿は確かに金賢姫を思い出させる。ただ、いずれにしろ、このような、国境をはさんで体制の違う国がにらみ合う事態に対し、日本は夢遊病者のように接してきたであろう。

象づけられることになる<sup>12</sup>。

さらに、戯曲の構造が、この印象を強める。すなわち、すでに述べたように幕切れ近くで、芝居の冒頭のシーンが再び出てくる。このため、あまねの存在、彼女に生じたこと自体が、もしかしたらなかったかもしれない夢のようなできごととしても描かれていた。『南へ』は、戦前に日本が行ってきたことをしっかりと検証することなく、まるで夢のように、なかったかもしれないできごととして暮らしてしまっている日本人の姿を、鋭く描き出した戯曲と言えるであろう。

#### テキスト 参考文献

- 野田秀樹『解散後全劇作』新潮社 1998年  
野田秀樹『21世紀を憂える戯曲集』新潮社 2007年  
野田秀樹『21世紀を信じてみる戯曲集』新潮社 2011年  
野田秀樹『ひつまぶし』朝日新聞出版 2011年  
野田秀樹+鴻英良『野田秀樹 赤鬼の挑戦』青土社 2006年  
内田洋一責任編集『野田秀樹』白水社 2009年  
長谷部浩『盗まれたリアル 現代演劇は語る』アスキー 1998年  
長谷部浩『野田秀樹論』河出書房新社 2005年  
『悲劇喜劇』2003年7月号 早川書房 2003年  
『悲劇喜劇』2011年5月号 早川書房 2011年  
『文學界』2000年1月号 文藝春秋 2000年

<sup>12</sup> この観点からは、幕切れは、戯曲のままの方が、実際の上演にまさるように思う。すなわち、実際の上演では日本軍の帽子をかぶった南が一人去って行くという演出になっていたが、これだと、最近のテレビドラマなどでも時々見るが、英霊たちが「俺たちは国のために必死に戦ったのに、今の日本人は墮落した」と追求するような表現に陥っていないだろうか？ 南すらもあまねを忘れて、テレビの野球（もしかすると火山の噴火の映像）に興じるという方が、すぐれているように思う。もっとも、あまねが、宝永のノリヘイについて2番目の物語を語り終えたあと、「これなら響きましたか？ 南ノリヘイという英霊の声が」（p.323）と言っているので、戯曲執筆時から南は英霊であるというとならえ方を、野田はしていたのかもしれない。